
オタク達の日常・序～開幕する世界～

ワシン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オタク達の日常・序／開幕する世界／

【Nコード】

N9483Y

【作者名】

ワシン

【あらすじ】

ほのぼのとギャグに、恋愛とバトルを足したオタク達の日常を描いた世界の話です
バトルシーンが少し多めですが、
少しでも楽しんでもあえたら嬉しいです

♪プロローグ♪

♪プロローグ♪

◆????◆

???? 「君と出会った日からすでに

2人の物語は始まっていたんだ
恋なのか友情なのか分からない

月日が経てば経つほど答えが近くなるよ

あなたは私のことどう思ってるの
私達は気持ちを確かめ合った
その答えは相思相愛だったよ

2人の物語は愛が結ばれて
終幕する・・・終幕するよ」

そう、これは2人の恋の物語。

ほのぼのとギャグに、恋愛とバトルを足した
オタク達の日常を描いた世界の話なの。

♪プロローグ・完♪

第1話くオタク部く

◇オタク部の部室◇

ガチャッ

??? 「あれ？皆まだなんだ」

??? 「そうみたいだなー」

僕の名前は、くさはらつばき草原椿。

16歳の高校2年生だ。

僕の隣に居るのが、同じクラスで幼なじみの、あきえだこうよう秋枝紅葉。

何かと、僕の世話をやきたがるんだ。

嬉しいけど、本人には恥ずかしいから言わないけどね。

今、僕達は部活をするためにまだ、誰も居ない部室に来て他の部員達が来るのを、待った。

そして、それから10分経って

約1名と、顧問を除いた部員達が揃った。

??? 「さあ、今回も楽しい部活を始めるわよお！」

椿「今日は、何しますか？」

??? 「そうねえ、じゃあ雑談にしましょう！」

僕の問いに、この人・・・オタク部創設者兼初代部長のあまつぎれんか

天草蓮華先輩は、そう答えた。

椿「いつも通りですね」

??? 「まあ、良いじゃないですか

いろんな話が出来て、楽しくて好きですよ」

僕の言葉に、後輩のはるのおうか春野桜花は笑顔で答えた。

蓮華「そうよお、楽しく過ごせるなら何だって良いじゃないあい

ツバツバのツンは、相変わらず健在ねえ」

椿「べ、別にツンなんかじゃないですし！

そ、それと変なあだ名で呼ぶのは、やめて下さいよ！」

蓮華「あらあ、ツバツバ可愛いじゃないあい

ねえ、2人ともお？」

蓮華先輩の問いに、2人は――――

紅葉「はい」

桜花「右に同じです」

と、答えにたいして僕は――――

椿「嘘だッ!!!」

と、返した。

蓮華「生○会の○存の、生徒会副会長言ってたわよお

今は、ひ○らしよりか、う○ねこだって」

紅葉「そうだぞー、ほら

蜂蜜金柑のどアメあげるから機嫌直せよー」

椿「わあ、ありがとうー」

紅葉から貰った、アメを口に入れた僕は――――

椿「つて、何でやねん!」

思いっきり、ツツコンだ。

桜花「ナイス、ツツコミです先輩!」

蓮華「良く出来たわねえ」

紅葉「偉いぞー」

椿「もう、何なんだよ」

バカなの?!死ぬの?!」

3人「「ハハハハwwww」」

まあ、そんなこんなでも充分楽しいし、居心地も良いからこの部員の皆との時間を、大切にしたい。

それから、僕達が通ってる学園りょうえんがくえんについて、説明しておこう。

学園の名前は、良縁りょうえん学園だ。

名前の由来は、初代校長がこの学園で良い縁を築いていけるようにって、

気持ちを入れて名付けたんだ。

第2話　桔梗の危機

第2話　桔梗の危機

◇???◇

??? 「さてと、もうすぐゲームの開幕だ

　　楽しみね、あはははははwwww」

　　まずは、あの人がどう出るかだね。

??? 「しかし、上手く行きますかね？」

??? 「絶対に来る、あの人はそういう人だよ」

??? 「自信あるんですね」

??? 「あるよ、だってあの人のこと良く分かってるから」

??? 「そうですか」

　　そして、アンタ達是用済みだ、あははははは。

◇オタク部の部屋◇

桜花「皆さんが揃ってから、30分は経つのに

　　桔梗先輩、遅いですね」

紅葉「まだ、掃除終わらないのかなー？」

椿「いやあ、さすがにもう終わってるやろ」

　　多分、今はこっちに向かってる最中だと思う

　　にしてもアイツ、勉強と放課後の掃除キライだからなあ」

蓮華「アハハ、あの娘らしいわねえwwww」

ピンポンパンポン

??? 「放送委員からの連絡です！

　　今さきほど、校内に不審者が3人ほど侵入して来たよう
　　です！

　　先生達が巡回しているので、残ってる生徒は至急、安全
　　な場所に

　　隠れるなり教室などにいてる生徒は、鍵を閉めて身を守
　　って下さい

警察には、通報しましたので警察の方々が来れば、安全です」

プツンッ

椿「不審者3人組だってよ、コワイなあ」

紅葉「何言ってるんだよー、もし不審者が来ても椿なら大丈夫だろー」

桜花「椿先輩、強いですしね」

校内中の先生と生徒全員のお墨付きですもん

蓮華「そうよー――」

???「キヤアアアアッ!!」

オタク部一同「「「ッ!?!」」」

桜花「何ッ?!」

椿「あの声、桔梗かッ?!」

蓮華「廊下からだわ!!」

紅葉「もしかして、不審者3人組に遭遇したのかッ?!」

椿「僕、行って来る!!」

◇廊下◇

僕は、急いで廊下に出て、声のする方へ駆け出した。

すると、そこには不審者らしき3人組に絡まれている、桔梗の姿があった。

椿「桔梗ッ!!」

桔梗「椿君ッ!!」

第3話〈椿VS不審者3人組・前編〉

第3話〈椿VS不審者3人組・前編〉

◇廊下◇

椿「・・・。」

不審者の1人は、桔梗腕を掴みながら他の2人と一緒に、僕を睨んできた。

不審者1「おう、チビ何見とんじゃあッ?!」

ピクッ

不審者2「痛い目にあいたくなかったら、とっとと失せろよチービw w w」

ピクッ、ピクッ

ああーあ、コイツら人が1番気にしてるキーワードを、ずけずけと・・・。

ふん、こういう生意気な奴らを痛みつけて、泣きながら床に這いつくばって

僕に助けを求める姿を想像したら、何かゾクゾクしてきたなあ、あははw w w

不審者3「おい、聞こえなかったのか?

早くどっかに消えろよ、今からこの娘と楽しいコトを、するんだからなあ」

桔梗「イヤよ、離してッ!!」

椿「嫌がる女の子を、テメェらみたいなゴミクス達が、よってたかって

見てて吐き気するんだよ、目障りなんだよ、うぜえんだよ、キモイんだよッ!!」

さっさと、その汚い手を離して帰りやがれッ!!

この、ゲロカス共があッ!!」

不審者1「何だとこの、チビがああああッ!!」

不審者の1人が、僕に殴りかかって来た。

椿「やれやれ、だな」

僕に殴りかかって来た、不審者の1人のパンチをよけて相手の腹に膝蹴りひざげりをして、更にそのまま相手の顔を掴んでアイアンクローをした後、

相手の頬に回し蹴りを、お見舞いしてノックアウトした。

不審者の1人は、蹴り飛ばされて倒れた後、そのまま気絶状態になった。

不審者2「何だ、このチビ・・・。」

不審者3「メチャクチャ強えじゃねえか・・・。」

椿「どうした？」

チビ相手に、ビビったか？！

だったら、そこに無様みさまに倒れ込んでるゴミクズを連れて、

とつとと消え失せなッ！！」

第4話〈椿VS不審者3人組・後編〉

第4話〈椿VS不審者3人組・後編〉

◇廊下◇

不審者1「ぐッ……。」

椿「ん？」

ドガッ

不審者1「がはッ……。」

バタッ

僕は、気絶したと思った不審者の1人が起き上がろうとしたので、とりあえず、下段回し蹴りを頬に命中させて、今度こそ気絶させた。不審者2「ヤロオオオオオッ!!」

椿「1人ずつで、僕に勝てると思ってるのかねえ」

2人目の不審者は、僕に蹴りかかって来た。

椿「そーれッ!!」

だけど、僕はそれを回避してそのまま、相手の股間に回し蹴りでダイレクトアタックした。

ドゴッ

不審者「ぬおぎぎゅぎゅ、ぐっぎいおあやあああーッ!!」

バタッ

かなりの奇声を上げて、倒れた2人の不審者はそのまま気絶した。その姿は滑稽で僕は腹を抱えるほど、大爆笑した。

椿「あははははは、はははははッ!! W W W」

やばい、ワロスワロス W W W

不審者3「この、外道が……。」

椿「さてと、残るのはアンタ1人だな

アンタは、どんな奇声や悲鳴を上げてくれるのかな? かな?」
不審者3「くそおおおおッ!!」

こんな、チビにいいいいッ!!」

残りの不審者は、桔梗の腕を掴んでいた手を離して、僕に向かって駆け出した。

その姿は、まさに校門を駆け抜けるかの如く。

椿「椿流武術・瞬影————」

僕は、素早い瞬間移動の如く、影の姿となりて相手の背後に回り込んで———

椿「後ろだよ」

不審者3「なッ————」

残りの不審者が、振り返るとともに———

椿「暴弾の嵐・蓮ッ！！」

ドガガガガガガガガガガガガガガガガッ

不審者3「ぐほおおおああッ！？」

そのまま、弾が暴れるがの如く不審者に四方八方、

拳や蹴りのラッシュを連続で繰り出して、完全にノックアウトした。

不審者3「がはッ……。」

バタッ

椿「何だ、もうこれで終わりかよ

つまんねえなあ、もっと楽しませて欲しかったぞお」

本当、もっと楽しみたかったのに少ししか満たされなかった。

椿「よし、桔梗！

とつとつ、部室にずらかるぞ！」

桔梗「う、うん」

こうして、救出した桔梗と共に僕は急いで、部室へと駆け出した。

◇廊下の角◇

「……。」

「本当に上手くいったな」

「ああ」

「そんじゃあ、こっちも戻るとするか」

「わかった」

「よし、行くぞ」

第5話　桔梗との出会い・前編

第5話　桔梗との出会い・前編

◇オタク部の部屋◇

椿「ああ、疲れた」

不審者達を、倒してから急いで2人で部屋に戻った。

桔梗「椿君、さっきは助けてくれてありがとうね」

後、紹介遅れて今さらだけど、コイツの名前は咲道桔梗。さきみちききょう

僕と紅葉と同級生で、クラスも同じなんだ。

椿「別に、普段のことだから良いよ」

蓮華「あれ、ツバツバが珍しくツンデレじゃないわ」

紅葉「本当だー、大丈夫かー？」

桜花「どうしたんですか？」

椿「別に、どうもしねえーよ」

—桔梗視点—

椿君、また私のこと助けてくれたなあ。

正直、あの時みたいに嬉しかった。

確かあれば、初めて椿君と紅葉君と出会って、仲良くなった日に

ガラの悪い男2人組に、ナンパされてた時かな……。

その時は、梅田のま○だらけに行く途中だっけ……。

◇1年前・梅田の○通り商店街◇

桔梗「いい加減にして下さいッ！」

ナンパ男1「良いじゃん、ちょっとくらいさあ」

ナンパ男2「そうそう、どうせ1人じゃ寂しいし退屈だろう？」

桔梗「そんなことはありません！」

まあ、別に嘘はついてないし何より、この人達から早く離れたかった。

周りの人達は、私達のやりとりを遠くから見ただけだったり、素通りやら、見て見ぬフリばかりで、助けてすらしてくれない。

椿「嫌がる女の子を、自分達の下らない勝手な都合で

連れ出そうとするなんて、クズ極まりないな」

桔梗「え・・・？」

ナンパ男1「ああ？」

ナンパ男2「何だあ？」

私とナンパ男2人組は、声のする方へ向いた。

そこには、紅葉君を連れた椿君がいたんだ。

椿「紅葉、カバン頼むね」

紅葉「了解」

椿「とつとつ、その人から離れてどつか行きやがれッ！！」

ゲス共がッ！！」

ナンパ男1「何だと、コラアアアアッ！！」

ナンパ男2「やんのかああああッ？！」

ナンパ男2人組は、椿君に殴りかかって行った。

第6話く桔梗との出会い・後編く

第6話く桔梗との出会い・後編く

◇○通り商店街◇

椿「やれやれ、だな」

椿君は、ため息まじりにそう言うのと、殴りかかって来た

ナンパ男2人組の攻撃を回避してた。

ナンパ男1「くそッ」

ナンパ男2「ナメやがってッ」

椿「テメェらみたいな、虫ケラの穀潰しこくつぶのカス以下の雑魚の残骸の

攻撃なんて、トロい遅い弱いヘボイ幼稚すぎて、当たるわけねえだろお全然よお、なあ？」

ナンパ男1「この、クソがああああッ！！」

ナンパ男2「うおおおおッ！！」

椿「バイバイ、椿流武術・双掌爪そうしょうそうが牙ッ！！」

ガッ、ガッ

◇現在・オタク部の部室◇

その後、ナンパ男2人組を倒した椿君にお礼を言って、少し話をした。

同じ学校で同級生で同じクラスってことが、分かってそれから同じオタクってこともあり、仲良しになった。

で、一緒にまん○らけに行ったんだよね。」

桜花「ところで、今日はもうそろそろ終わりにしませんか？」

紅葉「そうだなー、警察の人達が到着して学園に残ってるってことで、

いろいろと聞かれるの面倒だしなー」

蓮華「そうねえ、じゃあ今日はもう部活終わりってことで、ツバツバと桔梗も良い？」

椿&mp;桔梗「はい」

蓮華「よし、本日のオタク部」

オタク部全員「」「」「終了♪」「」「」

椿（これって、生徒〇の一存のアニメの、パクリだよなあ・・・。）

第7話　椿と紅葉のお泊り会

第7話　椿と紅葉のお泊り会

◇椿の部屋◇

あれから、僕達は急いで学園を出た。

紅葉と帰宅中、明日は休日ってことで僕の家泊まりたいって、言ってきたのだ。

まあ、ちょうど僕の両親は海外出張でしばらくの間、1人暮らし状態だから

別に良かったので、承諾した。

椿「紅葉、風呂わいたけどどうする？」

紅葉「そうかい、また一緒に入るかい？」

椿「別に、良いぞ」

紅葉とは、小さい頃からの付き合いで現在も互いの家に泊まる時に、風呂は一緒に入ってるから互いの裸なんて見慣れてるしね。

紅葉「よし、じゃあ久しぶりに体や頭を洗ってやるぞ」

椿「なんか、お前に洗ってもらうと不思議にも安心するんだよね」
昔から、本当に何かと面倒を見てくれるので、こういうのもいつものことだ。

紅葉「じゃあ、入ろうぜ」

椿「うん！」

こうして、紅葉と風呂に入った僕は、そのままベッドで2人一緒に横になった。

◇椿の部屋・ベッドの中◇

椿「わあ、やっぱり紅葉は大きい分、抱きつくとか何か安心するな」

紅葉「そうかい、俺も椿を抱いてると安心するぞ」

どっちかの家で泊まる時は、いつも2人一緒のベッドで寝るんだ。
それは、小さい時からそうだし互いの両親からは、仲良しの兄弟みたいって

認識されてるから特に、違和感もたれてない。

そして、寝る時は決まって僕は紅葉に抱きついて寝て、
紅葉も、そんな僕を抱きしめてくれるんだ。

紅葉「椿、俺ずっとお前のこと—————」

椿「zzzzzz」

紅葉「ハハハ」

第8話　桜花の歌の夜と椿への芽生える気持ち・前編

第8話　桜花の歌の夜と椿への芽生える気持ち・前編

◇桜花の部屋◇

桜花「あ、はい

明日は、日本橋に行って買い物するんですよ

桔梗先輩も、どうですか？

はい、ああそうですか

用事なら、仕方ないですよ

また、今度お誘いしますね

では、失礼します」

ピッ

桜花「桔梗先輩、用事ってことは明日は1人か」

明日、日本橋で買い物するのに桔梗先輩を誘ったんだけど、

桔梗先輩は、明日用事があるみたいで1人で買い物することになった。

桜花「椿君と紅葉君も誘うかな、寝てたら悪いからメールだけ送るところと」

私は、椿君と紅葉君にメールを送った後、帰り立ち寄った本屋で買った

新刊のBL漫画を、読むことにした。

—30分後—

桜花「さてと、新刊のBL漫画も読み終わったコトだし、ちょっと歌おうかな」

私は部屋で、新刊のBL漫画を読み終わった後、カバンの中から今日、放課後の不審者達の騒動の帰りに椿先輩から渡された、数枚の紙を取り出した。

数枚の紙には、それぞれ椿先輩が書いた詞が綴られていた。

桜花「どれにしようかな」

数枚の紙の中から、一枚の紙を選んだ。

桜花「まずは、この『安らぎとぬくもり』からにしようっと♪」
そして、私はそのまま歌い始めた。

桜花「僕が落ち込んでたら

君はなぐさめてくれたね

優しいぬくもりが心地良かった

いつまでも頼ってばかりじゃダメだ

もう大丈夫君のおかげで元気になったよ

気丈にふるまう僕に君は言ったね

無理しなくていいんだこういう時は

素直に泣いたっていいんだよ、と

その言葉を後に目から涙がポロポロ

零れ落ちて君に縋り付いて泣きじゃくったよ

そんな僕に抱きしめてくれた暖かい安らぎ

いつまでもこの安らぎとぬくもりを感じていたい・・・」

いつ歌っても、椿先輩が書いた詞は良いなって思える。

桜花「そういえば椿先輩、何で私のために・・・？」

私は、オタク部に入部した時に初めて、椿先輩と出会って仲良くな
った。

第9話〈桜花の歌の夜と椿への芽生える気持ち・後編〉

第9話〈桜花の歌の夜と椿への芽生える気持ち・後編〉

◇入部当日・オタク部の部屋◇

桜花「私が好きなコトは、BLと歌うコトです

よろしく願います」

◇桜花の部屋◇

自己紹介の中で私は、そう言った。

そしたら、先輩達の中で一番反応をしめしてくれたのは、椿先輩だった。

椿先輩と共通の趣味がBLと歌で、作詞も趣味と言われて私は、歌うのは好きだけど作詞が出来ないコトを話したら、快く作詞を綴った数枚の紙を提供してくれた上に――――

◇入部当日・オタク部の部屋◇

椿「じゃあ、君が歌えるように君の分も、僕が作詞するよ」

◇桜花の部屋◇

私が歌えるようにと

私の分まで作詞するって、笑顔で言ってくれた。

そう言ってくれた時は、本当にありがたいって思ったし、嬉しかったなあ。

桜花「何だろう、この気持ち……」

椿先輩と一緒にいたり、共通の趣味で話があう時が一番楽しくて

心が安らぐのは……」

あれっ……何か急に椿先輩のコト考えたら胸がポカポカしてきたよ……

桜花「まあ、今は深く考えるのは辞めて、歌の練習の続きでもするか」

それから私は、寝るまでずっと歌の練習をした。

第10話 桔梗の椿への気持ちと動き出す存在

第10話 桔梗の椿への気持ちと動き出す存在

◇桔梗の家・桔梗の部屋◇

桔梗「椿君、今日も私のコト助けてくれて、嬉しかったなあ

好きな人が、私の危機^{ピンチ}に駆けつけてくれるのって、幸せだよ

」

まあ、片思いなんだけどね・・・私の・・・。

肝心の椿君は、桜花ちゃんと仲良しだし、趣味や好きなコトとかも共通してるし、互いに一緒にいて楽しそうに見てると

何か辛いよ・・・私も、何か椿君と共通するものがあればなあ・・・。

桔梗「蓮華先輩は、椿君のコトどう思ってるのかな・・・？」

もし、蓮華先輩も椿君のコトが好きだったら、どうしよう・・・。

桔梗「・・・」

私は、少し悩んでから携帯で電話するコトにした。

桔梗「もしもし、ちょっとお願いが—————」

—10分後—

桔梗「そういう、コトだからお願い」

ピッ

◇蓮華の家・蓮華の部屋◇

蓮華「よし、明日の戦国B A O A R Aの、オンラインイベントの準備は完璧ね！

明日に備えて、そろそろ寝ようかしらあ」

ピンポン

蓮華「ん？誰かしらあ、そういえば今日は母さんも父さんも、夜勤で遅いって言ってたわねえ」

2人のどっちなかなあ？

◇蓮華の家・玄関◇

蓮華「はい？」

ガチャッ

蓮華「どな————ッ!？」

??? 「こんばんは、そしてさようなら」
ザクッ

蓮華「ぐッ、がはッ・・・。」
バタッ

??? 「呆気ないな」

??? 「むしろ、良かったじゃん」

??? 「とりあえず、さっさと済ますよ」

??? 「わかってるよ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9483y/>

オタク達の日常・序～開幕する世界～

2011年12月19日10時57分発行